

方言で心をつなげる通訳に

南カリフォルニア
南加岐阜県人会100周年からの風



日本を離れた時、私は小学6年生。もちろん日本語（と言っても東濃弁）以外は知りませんでした。父の仕事の関係で渡米し、英語を学ぶ環境に置かれることになりました。

時間は掛かりましたが、少ししゃべれるようになり、自信がつかと言葉やそれにまつわる文化に興味を持ちました。以来、好奇心に誘われるまま世界を転々とししました。おかげで英語、スペイン語が話せる様になり、今はロサンゼルス・ドジャースで通訳として働いています。

言葉とは面白いものです。外国にいると特にそうですが、同じ言葉をしゃべるといっただけで、親近感を覚えます。特に方言。

昨年はロスで多治見出身の人に出会い、同郷と知った途端「な〜に〜」と「な〜で上がって〜に〜」で下がる東濃アクセントが自然にできました。「な〜に〜」にはいろいろな意味が含まれていますが、説明なしに分かり合えるのが方言を話せる者同士の特権です。これはスペイン語でも同じです。チームにドミニカ共和国出身の選手がたくさん

いますが、私は彼らとスペイン語を話す時、なるべく彼らの方言を使うよう心がけています。彼らにとってもアメリカは外国。そして英語は外国語。お国の言葉がしゃべれるに越した事はありません。彼らは私の事を「パイサーノ（同郷人）」と呼んでくれます。

最近読んだ本にこんな事が書いてありました。一昔、馬を乗り換えて道中を続ける場所が「駅」であり、つまりつなぐ場所。通訳の「訳」は違う言葉を自分の言葉につなぐ事。

通訳という仕事を始めて四年目。この間、いろいろな言葉をつないできました。言葉をつなげば人がつながり、人がつながれば文化がつながる。文化が繋がれば世界が平和になる。通訳は平和の功労者。とまでは言いませんが、チームの「一和」に少しでも貢献しているのではと自負しています。

最近、岐阜にもたくさん外国人の方が住んでいると聞きます。彼らの言葉や文化を学んでみてはどうでしょうか。世界が広がり、つながると思います。（文・二村健次）



試合前、ブルペンから出てくるバッテリーを通訳。左（18番）は黒田投手



にむら・けんじ 1972

年、多治見市生まれ。83年渡米。カリフォルニア大学サンホゼ校文化人類学部卒、ニューヨーク大学院スペイン文学部卒（いずれもスペイン留学）。2008年ロサンゼルスドジャース入社。現在に至る。